

虹の架橋

今月の題字
真下陽子さん

(みどり市東町)
虹の架橋300号感謝の集いではハンドベルの指揮をされ、7月1日には富弘美術館で荒川洋さんのフルートと真下さんのピアノのジョイントコンサートが開催されます。

みどり市義援金付ポロ

今年も「頑張って登りモス」
みどり市義援金付ポロシャツを今年も足利屋で販売しています。集った義援金はウクライナからみどり市に避難してきている五人の人たちに寄付されます。



ポロシャツの色は白、ピンク、ブルー、黒、グレーの五色でサイズはSSから5L。一枚千八百円(3L以上は二千円)の中に義援金三百円が含まれています。
昨年は八百三十一枚のポロシャツを販売、二十四万九千三百円の義援金をウクライナからの避難者に支援金として寄付されました。

「みどモス」がボルダリングに挑戦する図柄。みどり市の新採用職員五名が提案した「頑張って登りモス！」のデザインを足利屋が胸に刺繍しました。



みどり市では今年四月一日、東町神戸の旧東中学校体育館二階にボルダリング施設をオープンしました。平日は午後五時〜午後八時(最終入館は午後七時)、土・日祝日とみどり市の春季、夏季、冬季学校休業日は午前九時〜午後八時に開館。休館日は月曜日(月曜が休日の場合は翌日)、利用料金はみどり市内在住、在勤、在学者は無料です。
お問合せは、みどり市役所東支所：0277(76)0984、または、管理代表者関口：090(9012)5500
義援金付ポロシャツを着て、みんながボルダリングに挑戦しましょう！



小耳にはさんだ

いい話 (文責・菊)
《335》

ハガキ一枚の力

「虹の架橋三百号感謝の集い」では、OKバジこと垣見一雅さんの講演会をしたと思いましたが、多くの方々に垣見さんの誠実な人柄を知ってもらいたくて、ネパールから日本に帰国する日程に合わせて感謝の集いを六月四日と決めました。

ネパールで支援活動が続いている垣見さんを知ったのは二十年前ほど前のことでした。「OKバジを支援する会」や「富弘美術館を囲む会」の設立に尽力された桐生の富澤繁司さんの紹介

で垣見さんと出会い、すぐに大ファンになりました。初めて僅かばかりの支援金をネパールに送ったところ、「お預りしたお金で村の学校にロッカーを贈りました」という達筆なお礼状とMATUJAKI「MAN」と大きく書かれたロッカーの周りで手を振る子供たちの写真が送られてきて大感激しました。垣見さんが2019年に出版した『からっぽがいい』という本には「小さなことに感謝できる人はそのぶん人生を楽しめる」と書いてあり、それが垣見さんの生き方そのものであると思いました。この本の中で垣見さんは「私はこの二十五年間、ドナー(支援者)に対して、たとえハガキ一枚でも出し、報告をすることの大切さを教えられた。千円の寄付に對して千円以上の喜びをドナーに返すことができれば寄付は続く。一枚のハガキの力を信じる。」

毎年父の日にネクタイを買う代金の中から、千円寄附して下さる方がいる。その千円でネパールの山奥の子どもたち十人に一冊二十円のノートを買ってプレゼントした。子どもたちがそのノートを高く上げた姿を写真に撮り、ドナーに送った。ドナーは自分の

千円がこんな形で活かされたこと、喜びの手紙を送ってくれた。それを受取った私も、さらに嬉しくなり、お礼のハガキを書いた。小さな喜びのキヤッチボールである。今年も父の日の前に九州のNさんから「OKバジさんに渡して下さい」と千円が届きました。



梅雨晴れや同行二人の影法師
毎朝般若心経をお唱えしながら歩いていきます。十五回お唱えするとほぼ四千歩になります。梅雨の晴れ間のウォーキングは格別に心地よいもので、朝日を背に歩いてると自分の影法師が行き先を先導してくれているように感じられます。「同行二人」とは、四国巡礼でお遍路さんが白装束の背中に書いてある言葉で、弘法大師様がいつも一緒に歩いてくれているという意味が込められています。自分自身の心の中にも弘法大師様や先祖がいて人生を導いてくれていると思うと心も穏やかになり、足取りも軽くなってきました。

世界一小さな 定利屋 トイレ美術館

今月の詩画《335》
大野勝彦さん『倅せは...』



熊本県阿蘇山の麓に美術館を持つ、義手の詩画家・大野勝彦さんと二十年来のご縁をいただき、大間々の「ながめ余興場」でも二回、感動と笑いの講演会を開催しました。大野さんの詩画に「倅せは気づいた時から始まる。ほんとうは幸せなだけ。さよならのあとに気づく」という作品があります。不慮の事故で両手を失い、入院中に読んだ星野富弘さんの『愛・深き淵より』に感動して詩画を描きはじめてという大野さんの作品も感動に溢れています。七月一日から三十日まで足利屋休憩コーナーで『大野勝彦ミニ作品展』を開催します。

靖ちゃん日記

令和五年六月四日(日)
「虹の架橋三百号感謝の集い」に四百人近い人たちが集まってくれた。掃除仲間の國方さんは四国から、池永さんや渡部さんは大阪から、小畑さんは宮城から、姉夫婦も東京からわざわざ来て祝福してくれた。虹の架橋を創刊した時にもまさかこんな日が来るとは夢にも思わなかった。感謝の集いの最後に夫婦揃ってステージに上り、まわりの花束をもらった。実行委員長の天川さんの和子がもらった花束の方が五倍も大きかった。仲間の幹事計らいが嬉しかった。マイクを渡され、おれの言葉述べた。ひとりひとりの仲間や出演者や客席の人たちを見ているうちに涙声になった。「七十歳を過ぎると、頭の回転も運動神経も鈍くなり、車に乗る時は衝突防止の「アイサイト」の機能に頼るだけではなく「愛妻」といっしょに残りの人生、道を踏み外さないように楽しみたい」と思い、やっちゃん日記の挨拶で締めくくった。

虹の架橋を検索で、インターネットからでもご覧いただけます。

第三百二十六号は令和五年八月一日(火)発行予定です。

靖ちゃんの似顔絵提供：ひさかさん